

肝機能の判明している 150 症例中 92 例 (61.3%) に脾臓影が認められたが、肝以外の疾患群で、GOT, GPT 50 以下の症例においても、75 例中 41 例 (54.8%) に脾臓影がみられた。肝シンチグラムにおいて、脾臓影がみられる場合は、肝脾疾患、特に門脈圧亢進状態が存在するとされているので、この問題を放射線医学的に検討してみた。

あらかじめ $^{131}\text{I-AA}$ 肝スキャンで脾臓影のみられないことを確認した後、その犬の門脈を結紮し、あるいは狭窄を起させ、門脈圧亢進状態が起きてから、 ^{198}Au コロイド肝スキャンを行なうと、コロイドの肝への集積はみられたが、脾への集積はみられなかった。単なる門脈圧亢進のみでは脾臓影は出現しないと考えられた。

選択的腹動脈造影に引続き、同一カテーテルから $^{131}\text{I-MAA}$ をゆっくり注入して、肝と脾の血流スキャンを行ない、金コロイド肝スキャンと対比した。MAA 肝スキャンでの脾臓影は動脈造影による脾臓影とほぼ同大であったが、金コロイド肝スキャンでの脾臓影は動脈造影による脾臓影が 60cm^2 以上になると出現しやすい傾向が認められた。脾臓影の大きさは脾動脈の太さと相関 ($r=0.69$) が認められた。金コロイド肝シンチグラムに脾臓影が出現するためにはある程度の脾の増大を必要とし、これには脾血流量も関連があると考えられた。

金コロイド肝シンチグラムにおいて脾臓影を認めた症例の中、剖検による肝および脾の組織学的所見によると、肝における変化は種々であるが、脾における変化は、大部分の症例に細網細胞の増生等の異常所見が認められ、網内系のコロイド摂取能力の亢進の存在が考えられた。

結論として、一応肝および脾が正常とみなされる症例においても、肝シンチグラムに脾臓影を認めた場合は、脾の増大があると考えられ、脾への血流増加、脾網内系のコロイド摂取能力亢進と関連があると考えられた。

*

28. $^{131}\text{I-BSP}$ の臨床的応用

右田 徹 上田英雄 亀田治男
飯尾正宏 井出和子
(東京大学 上田内科)

最近 Tubis らは BSP の放射性ヨウ素標識について簡便な変法を発表している。われわれはこの方法に準拠して調整した $^{131}\text{I-BSP}$ (ダイナボット研究所) を肝スキャンに応用し、臨床的に有用なことを認めた。

臓器分布：白鼠の尾静脈に $^{131}\text{I-BSP}$ を注射、一定の時間間隔で 3 頭宛屠殺、各種臓器の放射能を計測し、平

均の % dose を算出した。最初の 1 時間には BSP は大量に肝に蓄積されるが、一方胆道排泄も早期に始まり、24 時間内に 80% 以上が排泄されている。

胆汁中 BSP：イヌに $^{131}\text{I-BSP}$ を静注後、予め総胆管に挿入したカニューレより胆汁を採取、ラジオクロマトグラフィーにより検討した。この胆汁と $^{131}\text{I-Na}$ ならびに $^{131}\text{I-BSP}$ を同時に展開させると、Rf. は胆汁 0.54, NaI 0.23, BSP 0.62 で、胆汁中遊離の ^{131}I がみられず、また胆汁に排泄される BSP は何らかの化学変化を受けていると考えられる。

臨床成績：BSP 量として、2~9mg. 約 $300\mu\text{Ci}$ の $^{131}\text{I-BSP}$ を静注し、20分、3時間、6時間など肝スキャンを反復施行。採血法により血中消失率も測定した。正常例または多少肝摂取率が低下しても胆道閉塞のないものでは、注射 20 分後のスキャンで満足すべき肝シンチグラムがえられるが、すでに濃厚な胆嚢像が出現している。通常の肝スキャンは注射後 20 分には開始するのが妥当であろう。胆道閉塞例で腹部スキャンをくりかえすと、閉塞の程度に応じ、腸管排泄が遅延し、総胆管閉塞例では胆嚢のみならず、基幹胆管像の観察を期待できる。血中消失率の著明に遅延したものでは、注射後早期に血液プールとして心臓像も認められた。病状の膠着した総胆管結石例に 1 カ月の間隔で $^{131}\text{I-RB}$ (ローズベンガル) による肝スキャン施行し、比較した。血中消失率、腹部スキャン像の時間的経過のいずれからみても BSP の排泄は RB のそれより速い。

以上 $^{131}\text{I-BSP}$ は通常の肝スキャンに応用ができ、反復スキャンにより黄疸の鑑別に役立つ。また $^{131}\text{I-RB}$ に比し、胆道、腸管への排泄が速かである。

*

29. 放射化分析による肝の微量元素の定量

—第 3 報 臭素とヨウ素について—

岩瀬 透 上田英雄 飯尾正宏
亀田治男 (東京大学 上田内科)
長尾博之 谷 彰 (日本原子力研究所)

従来困難であった微量のハロゲン元素の定量も、放射化分析法によれば比較的容易である。われわれは、中性子放射化分析法のこの特性に着目し、肝の臭素とヨウ素の定量を実施した。

肝硬変 22 例・正常対照例の 9 剖検肝試料 50mg (乾燥重量) を分析対象とし、TTR-I 型東芝教育訓練用原子炉で 30 分間照射後、臭素・ヨウ素グループの迅速化学分離を 7 分以内に完了して、 γ 線スペクトルを記録し、 γ